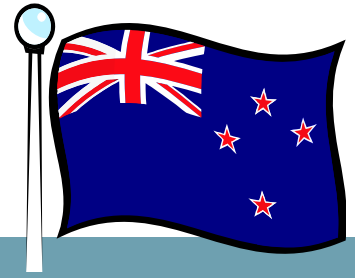


オセアニア[NZ]



1 農・畜産業の概況

ニュージーランド(NZ)は、温暖な気候と肥沃な土壌に恵まれ、国土面積(2680万ヘクタール)のうち、5割を超える1460万ヘクタールが農地となっている農業立国である。

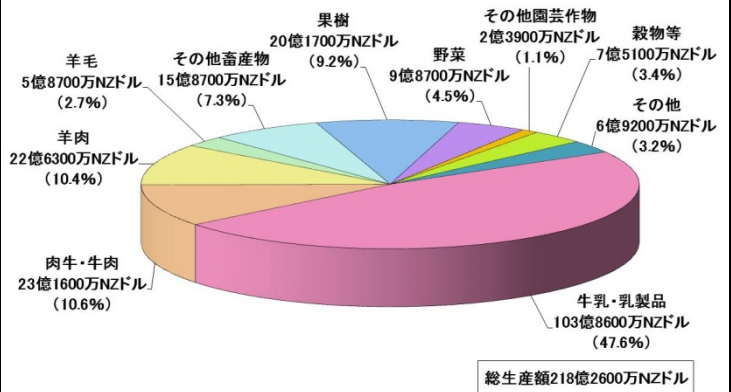
また、人口が約440万人と国内の市場規模が小さいため、NZの農業は貿易に依存した構造となっており、総輸出額(FOB)に占める農産物の割合は5割を超え、外貨獲得上、重要な地位を占めている。

畜産部門は、農業粗生産額の約3/4、農産物輸出額の約8割を占めており、特に酪農・乳業は、農業粗生産額の4割以上、農産物輸出額の5割を占め、NZの農業における基幹部門である。

2012/13年度(4月～翌3月)の農業粗生産額は、218億2600万NZドル(前年度比5.1%減、推計)となった(図1)。北島を中心とした干ばつの影響などから、牛乳・乳製品が103億8600万NZドル(同1.7%減)、羊肉が22億6300万NZドル(同19.8%減)、羊毛部門が5億8700万NZドル(同13.0%減)と減少した影響が大きい。一方、肉牛・牛肉は23億1600万NZドル(同1.2%増)とわずかに増加した。

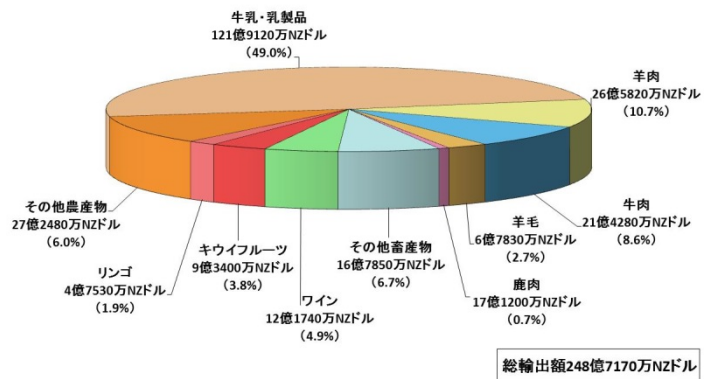
2012/13年度(7月～翌6月)の農産物輸出額(FOB)は、248億7170万NZドル(前年度並み)となった(図2)。畜産部門については、牛乳・乳製品および羊毛は生産額の減少に伴い減少した一方、牛肉は米国からの堅調な需要を背景に、かなりの程度増加した。同年度の品目別輸出額を見ると、牛乳・乳製品は121億9120万NZドル(同2.3%減)、羊肉(ラム・マトン)は26億5820万NZドル(同0.7%増)、牛肉(子牛肉含む)は21億4280万NZドル(同6.6%増)、羊毛が6億7830万NZドル(同12.6%減)となった。

図1 農業粗生産額(2012/13年度)



資料: MPI「Situation and Outlook For Primary Industries 2014」
注: 年度は4月～翌3月

図2 農産物総輸出額(2012/13年度)



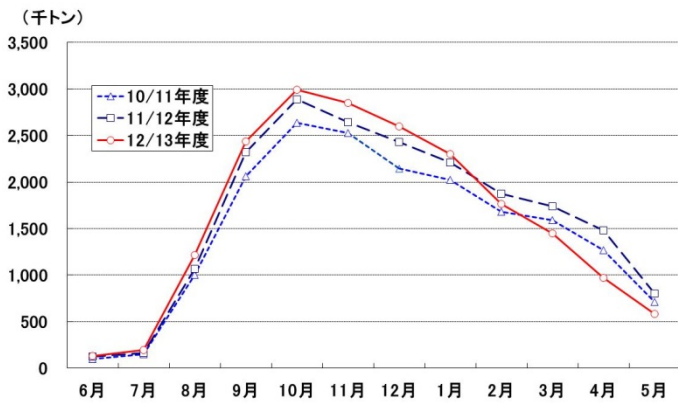
資料: Beef + Lamb NZ「Compendium of New Zealand Farm Facts (38th edition April 2014)」
注: 年度は7月～翌6月

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、年間の生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動しており、早春となる8月から搾乳を開始し、10月から初夏となる12月をピークにその後次第に減少、5月頃にはシーズンを終えるという、明確な季節型生産体系を示している(図3)。生乳生産の中心となる9月から翌2月の6カ月間で、年間の約3/4を生産する。

図3 生乳生産量の推移



資料: Dairy Companies Association of New Zealand

注: 年度は6月～翌5月

NZでは、粗飼料(放牧)に依存した生産体系により、生乳生産のコストは、世界的に見ても最も低い水準にある。生産量の95%が輸出に仕向けられる乳製品は、NZの総輸出額の4分の1程度を占めており、酪農・乳業部門は、NZの基幹産業の一つとして位置付けられている。

NZの生乳生産量は、全世界の4%を占めるにすぎないが、NZは世界最大の乳製品輸出国である。特にバターおよび全粉乳の国際市場でのシェアは5割を超える。国内市場の規模が小さいため、生乳生産者価格や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けざるを得ない状況にある。

① 主要な政策

酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しないが、ニュージーランド・デイリーボード(NZDB)が、2001年9月まで、乳製品の一元的輸出機能を持っていた。しかし、同年10月、2大酪農協とNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協(乳業メーカー)フォンテラが誕生し、酪農産業の再編が行われた。

フォンテラの誕生と同時に2001年、生乳および乳製品市場での競争を促進することを目的とした酪農産業再編法(Dairy Industry Restructuring Act 2001)が成立した。同法には、フォンテラの寡占による弊害を回避するため、乳業メーカーの新規参入の機会付与が盛り込まれている。このため、2012年現在、フォンテラには年間60万キロリットルを上限として、他社に生乳を供給することが義務付けられている。

② 生乳の生産動向

経産牛の飼養頭数は、酪農産業の再編や国際的な乳製品需要の増加を背景に、増加基調で推移している(図4)。また、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門へと転換が進んでいることも、経産牛飼養頭数増加の要因となっている。

近年では、特に南島での頭数拡大が著しい。NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域などを中心に行われてきた。しかし、乳製品の国際価格の高騰を契機に、南島のカンタベリー地域などでかんがい施設が整備され、南島での酪農が盛んになった。2012/13年度(6月～翌5月)の経産牛飼養頭数は、478万4000頭(前年度比3.2%増)で、うち北島は295万5000頭(同1.4%増)と、わずかな増加にとどまる一方、南島は182万9000頭(同6.3%増)と、かなりの程度増加した(表1)。

飼養規模の拡大や、補助飼料の給与増加による1頭当たり乳量の増加傾向から、生乳生産量も右肩上がりの推移となっている(図4)。しかし、2012/13年度は、北島を中心とした記録的な干ばつの影響から、1頭当たり乳量は3947リットル(同4.4%減)、生乳生産量は1888万3000キロリットル(同1.3%減)と、ともに前年度を下回った。

図4 乳用経産牛飼養頭数と生乳生産量の推移



資料: Dairy NZ 「Dairy Statistics」

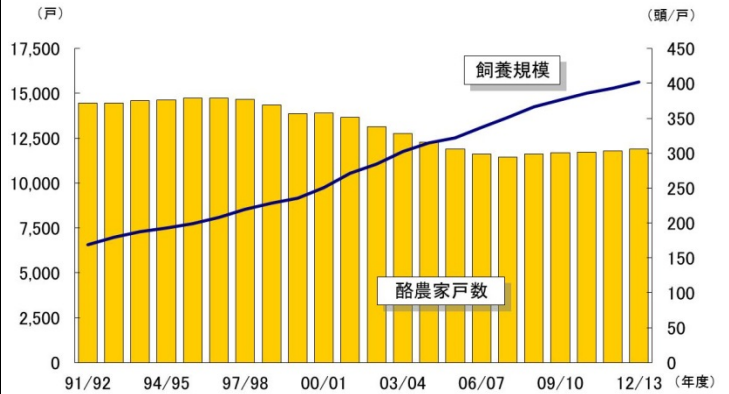
注 1: 年度は6月～翌5月

2: 乳用経産牛頭数は12月末時点

酪農家戸数は、2007/08年度まで減少傾向で推移していたが、同年度の乳製品の国際価格の高騰により下げ止まり、2012/13年度は、1万1891戸(前年度比0.8%増)と、5年連続で前年度を上回っている(図5)。一方、1戸当

たりの経産牛飼養頭数は、規模拡大による増加傾向が続いており、2012/13年度は、402頭(同2.3%増)となった。500頭以上を飼養する経営が全体に占める割合は26.3%、1000頭以上を飼養する経営が全体に占める割合は4.6%となった。

図5 酪農家戸数と飼養規模の推移



資料: Dairy NZ 「Dairy Statistics」

注: 年度は6月～翌5月

表1 地域別の飼養戸数・頭数・規模の推移

地域/区分・年度	飼養頭数(千頭)					飼養戸数(戸)					飼養規模(頭/戸)				
	08/09	09/10	10/11	11/12	12/13	08/09	09/10	10/11	11/12	12/13	08/09	09/10	10/11	11/12	12/13
北島	2,821	2,862	2,906	2,914	2,955	8,998	8,973	8,947	8,912	8,912	314	319	325	327	332
南島	1,432	1,535	1,623	1,721	1,829	2,620	2,718	2,788	2,886	2,979	546	565	582	596	614
合計	4,253	4,397	4,529	4,634	4,784	11,618	11,691	11,735	11,798	11,891	366	376	386	393	402

資料: Dairy NZ 「Dairy Statistics」

注 1: 年度は6月～翌5月

2: 各年12月末時点

3: 頭数は当該シーズンに搾乳された乳用牛頭数

③ 牛乳・乳製品の需給動向

NZでは、最大手乳業メーカーのフォンテラの乳製品生産のシェアが約9割を占める。

輸出相手国は、フォンテラの企業戦略と相まって、中国、東南アジア、中東・北アフリカ、EU、北米など世界140カ国となっている。フォンテラは、2002年に世界的な大手食品メーカー「ネスレ」と合併企業を設立した。2003年1月からは、中南米の市場での乳製品製造・販売を手がけ、また2007年には、中国で牧場を建設し生乳生産を行うなど、国際市場への積極的な進出を図っている。

2012/13年度(7月～翌6月)の主な乳製品の輸出量は、中国などアジア諸国の堅調な需要を背景に、いずれも前年度を上回った。品目別では、バターが46万2000トン(前年度比4.6%増)、チーズは31万トン(同12.9%増)、全粉乳は128万1000トン(同13.8%増)、脱脂粉乳は41万3000トン(同18.4%増)となった(表2)。

表2 生乳生産量および乳製品輸出量の推移

(単位:千頭、千キロリットル、千トン)

区分/年度	08/09	09/10	10/11	11/12	12/13	
経産牛飼養頭数	4,253	4,397	4,529	4,634	4,784	
生乳生産量	16,044	16,483	17,339	19,129	18,883	
輸出量	バター	243	247	394	442	462
	チーズ	271	279	248	275	310
	全粉乳	683	903	1,068	1,126	1,281
	脱脂粉乳	330	384	349	349	413

資料: Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics New Zealand

注 1: 生乳生産量は6月～翌5月

2: 乳製品輸出量は7月～翌6月

3: 経産牛飼養頭数は各年度12月末時点

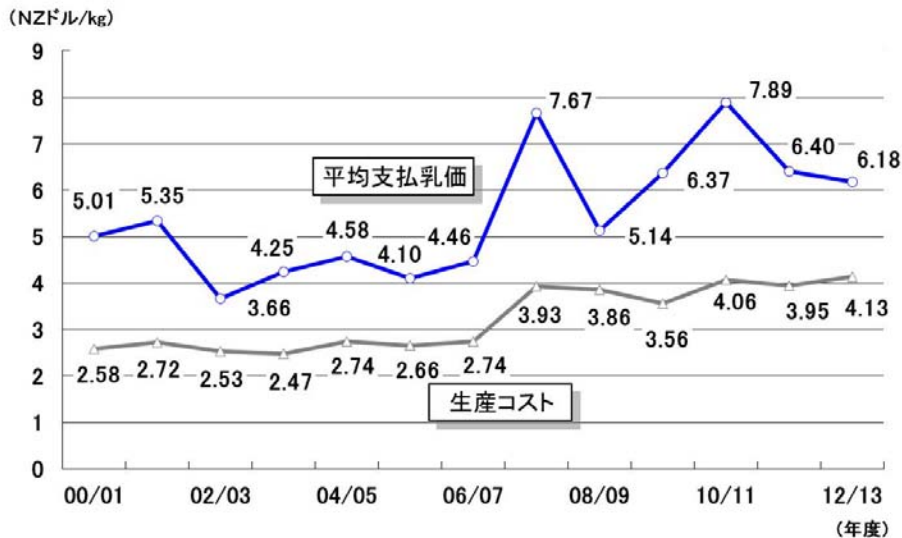
③ 乳価の動向

生乳生産者価格(平均支払乳価)は、乳製品の国際相場や為替相場(NZドル)の動向などに左右される。

2012/13年度(6月～翌5月)の生乳生産者価格は、国際乳製品価格が軟調であったことなどから、乳固形分1キログラム当たり6.18NZドル(前年度比3.4%安)と下落した(図6)。

一方、2012/13年度の生産コストは、同4.13NZドル(同4.6%高)となった。放牧中心の低コスト酪農が特徴のNZであるが、2007/08年度の乳価上昇後、補助飼料の投入やかんがい設備への投資などから、近年、生産コストは微増傾向で推移している。

図6 生産コストと平均支払乳価の推移(乳固形分ベース)



資料: Dairy NZ「Dairy Statistics」、 「Economic Survey」

(2) 肉牛・牛肉産業

NZの肉用牛生産は、草地に依存した生産体系となっており、フィードロットでの穀物肥育による生産は、ごくわずかである。

牛肉生産が酪農の動向と密接に連動しているのも、NZの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、生乳生産が終了する5月にピークを迎える。これは、牧草が減少する冬場を迎える前に、乳廃牛の出荷が増加するためである。その後、と畜頭数は春先にかけて大きく減少し、8月から9月にかけては、ピーク時の3分の1程度にまで減少する(図7)。

図7 成牛と畜頭数の推移



資料: Statistics NZ

また、肉用牛として飼養される牛の3分の1程度は、乳用種または乳用種と肉用種の交雑種となっている。さらに、酪農部門から供給される乳用種の雄牛は、多くは子牛肉として出荷されるものの、一部は去勢せずに飼養され、乳用経産牛と同様に加工用牛肉(ひき材用途)として、NZ最大の輸出市場である米国を中心に輸出されている。

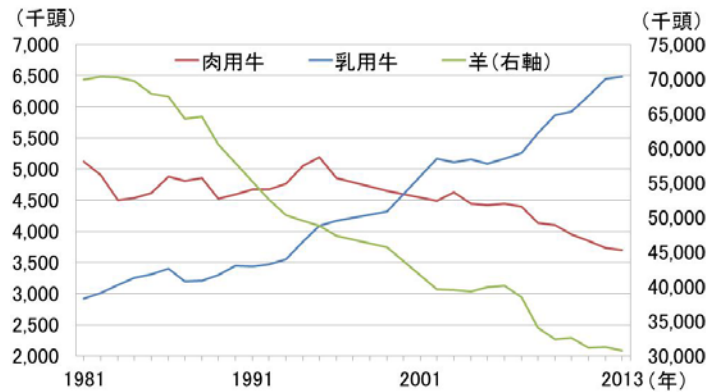
こうしたことから、酪農部門は、牛肉供給の面でも重要な役割を担っている。

NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから、酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉のうち、金額ベースでおよそ8割程度が輸出に向けられている。このため、肉牛・牛肉産業は、価格面などで国際市場の影響を強く受けている。

① 牛の飼養動向

長期的な肉用牛の飼養頭数の推移を見ると、収益性の悪化による経営規模縮小や、酪農、養鹿、林業など、より収益性の高い部門への転換などが背景となり、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000年には頭数が右肩上がりの乳用牛と逆転した。特に2007年以降は、国際乳製品価格の高騰から酪農業への土地利用の転換が進み、乳用牛が急増するとともに、肉用牛の減少傾向が強まっている(図8)。

図8 主要家畜の飼養頭数の推移



資料: Statistics NZ

2013年6月末時点の肉用牛飼養頭数は、同年初頭に肉用牛の7割が飼養される北島を中心に干ばつとなり、早期淘汰が行われたことから、全体では369万9000頭(前年比0.9%減)とわずかな減少にとどまったものの、繁殖雌牛が101万9000頭(同3.9%減)となった(表3)。

表3 牛飼養頭数の推移

(単位: 千頭)

区分/年	2009	2010	2011	2012	2013
肉用牛	4,101	3,949	3,846	3,734	3,699
うち繁殖雌牛	1,096	1,118	1,053	1,060	1,019

資料: Statistics NZ

注: 各年6月末時点

② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000年代前半までは概ね増加傾向にあり、一時は69万トンまで増加したが、その後は飼養頭数の減少と共に減少傾向にあり、2010/11年度以降は60万トンを切る水準で推移している。

2012/13年度は、北島の干ばつによる早期淘汰が要因となり、成牛と畜頭数は237万4000頭(前年度比8.3%増)、子牛と畜頭数は193万5000頭(同14.1%増)となった。また、牛肉生産量は59万8000トン(同3.9%増)、子牛肉生産量は3万1000トン(同10.7%増)となった。

成牛と畜頭数の内訳を見ると、特に経産牛が大幅に増加(前年度比26.0%増)した。これは、干ばつによる淘汰に加え、前年度が天候に恵まれたことから、生産拡大が続く酪農部門で例年よりも老齢牛の淘汰が減り、2012/13年度に多く持ち越されていたことも影響している。

イ 輸出動向

2012/13年度の牛肉輸出量は、と畜頭数の増加に伴って、36万7000トン(前年度比4.6%増)となった(表4)。

輸出地域別に見ると、最大の輸出先である米国を含む北米市場向けは19万トン(同6.3%増)となった。北米市場向けは従来、加工用牛肉が主体であり、経産牛のと畜増に伴い、輸出が増加した。また、北アジア市場向けは、2012年後半より急増した中国向けがけん引し、11万2000トン(同22.3%増)と大幅に増加した。

表4 牛肉需給の推移

(単位:千頭、千トン)

区分/年度	08/09	09/10	10/11	11/12	12/13
成牛と畜頭数	2,437	2,376	2,381	2,192	2,374
子牛と畜頭数	1,467	1,552	1,656	1,696	1,935
牛肉生産量	613	610	596	575	598
子牛肉生産量	24	25	27	28	31
牛肉輸出量	364	366	356	351	367

資料: Statistics NZ, Beef + lamb NZ「Annual Report」

注 1: 10月～翌9月

2: 生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース

③ 肉用牛価格の動向

NZでは、生産された牛肉のうち約8割(枝肉重量ベース)が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況や、主要決済通貨である米ドルや英国ポンド、ユーロに対するNZドル為替、また、最大の輸出市場である米国国内の牛肉生産や価格の動向に左右されやすい状況にある。

2012/13年度の輸出用肉用牛の生産者手取価格は、NZ国内での牛肉供給量の増加や高値で推移したNZドル為替の影響を受けて、1頭当たり933NZドル(前年度比8.2%安)と大きく下落した。

表5 輸出用肉用牛の1頭当たり手取価格の推移

(単位: NZセント/頭)

区分/年度	08/09	09/10	10/11	11/12	12/13
生産者手取価格	819	811	971	1,016	933

資料: Beef + lamb NZ「Farm Facts」

注 1: 10月～翌9月

2: 皮革が含まれる